

日本・イギリス・中国における煉瓦博物館整備の実情

著者	永野 光一，水野 信太郎
雑誌名	北海道女子大学短期大学部研究紀要
巻	35
ページ	53-64
発行年	1998
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000934/

日本・イギリス・中国における煉瓦博物館整備の実情

On Object of Brick Museum in Japan, England and China.

永 野 光 一	水 野 信 太 郎
Koichi	NAGANO
	Shintaro
	MIZUNO

I は じ め に

近年わが国においては、“博物館の時代”と言われて久しい感がある。この発想の元となった考え方は、以下のようなものであった。それは中央の大都市集中・大都市中心的な仕組みや考え方から脱却して、各地が固有する歴史や文化を積極的に評価しようとする動きによるものである。つまり日本中いや世界中のすべての都市や集落は、自国の首都やそれに準ずる大都市を追いかけ続けてきた従来の都市計画だけではなく、全く別の発想による計画手法を志向してもよいであろうというものである。わが国でいえば、全国の地方都市が東京だけを目指してミニ東京・リトル東京化することに努めた時代は終わったのである。

東京にもニューヨークにもロンドンにもパリにもない、自分たちのまち固有の歴史や文化や都市景観を、最大の拠り所にしようとする考え方である。ナンバー・ワンである東京に追いつこうとするのではなく、自らがオンリー・ワンであると自覚する発想である。そのためには自分たちのまちのよさを発見する必要が生まれてくる。まちや地域が持つ「財産」を発見し、その研究成果を集め（収集）、分け（分類）、残し（保存）、見せる（展示）ための文化施設が博物館である。ここに冒頭で“博物館の時代”と称した理由がある。

今日の新しいまちづくりは平仮名で“まちづくり”と表記される。それは漢字で“町造り”と表示する場合とは異なる。“まちづくり”は、計画を立案する仕組みや計画を実施に移す際の進め方から、専門家だけでなく住民などトータルな意味での人づくりの方法に至るまでの、ソフトな面を総合的に含む。

その広義の“まちづくり”と博物館の関係は、以下に述べるようなものである。現代の地方公共団体における都市整備は、地域博物館の準備・開館・運営などの活動を起爆剤として個性的な“まちづくり”を始動し、やがては地方分権化をも視野にいった、より積極的な発想の転換を試みようとしているのである。

このような新しい動きが意図するところは、単に制度上の変化だけを望んだり、それで満足したりするものではない。それ以上に価値観の大きな変革を期待している。つまり中央以外の各地に居住する人々自身が、自分たちの土地の風土とそれによって育まれた固有の在り方に理解を示し、やがてはその歴史や文化がもつ大切さを自負するまでになることこそが重要なのである。それぞれの地方都市ごとで、わがまちに関して自慢することができるような内容を見つ

けだそうというものである。このような最終的目標が設定されているという事情は、博物館だけに限らない。たとえば歴史的な町並みの保存や伝統文化に対する再評価、そして地域住民の手による祭りの復活なども、すべて同様な意識の面における目標があると言える。

II 研究の目的と意義

本稿は、上記のような国内の現状を鑑みながら、日本のみならず世界的な視野で見渡しても極めて特異な展示内容と考えられる建築用煉瓦の博物館の現状を報告するものである。そのことによって、各地の固有な歴史と文化遺産を活用したまちづくりへの試みをあわせて感じてもらいたい。

従来この分野の研究報告は、ほとんどと言って良いほどなされてこなかった。わずかに『輪環』¹⁾に掲載された小文である拙稿がある程度に過ぎない。『輪環』とは、自分たちのまちに残されている煉瓦造建築を活用してまちづくりを実践しようとする人々の団体である赤煉瓦ネットワークという組織の機関紙である。なお輪環（りんかん）あるいは輪環窯（りんかんがま）という名称は、煉瓦を焼成するために煉瓦を積み上げて築かれた、内部が一巡している特殊な窯の日本国内における呼び名である。世界的に通用する言い方では、その形状からリング・キルン Ring Kiln（輪窯）と呼ばれるか、設計者であるドイツ人窯業技術者フリードリッヒ・ホフマン Friedrich Hoffmann（1818–1900）の名を冠して Hoffmann Kiln（ホフマン窯またはホフマン式輪窯）と呼称されている大量連続焼成が可能な煉瓦窯である。

管見によれば世界の煉瓦博物館ないし煉瓦展示館は、日本とイギリスそして中華人民共和国に開設されているのみである。これらは実情として展示・公開の程度に差があるものの、いずれも現状では数少ない煉瓦博物館として見落とすことができない存在である。56 ページ以降に、この特異な分野の博物館について、それぞれ開館または設置された年代の順に報告することとする。

III 煉瓦の種類

各国や各地に設けられた煉瓦博物館の個別報告に移る前に、あらかじめ煉瓦に関する全般的な基礎知識を理解しておく必要があるだろう。そのため事前に煉瓦の概要を述べることにする。

煉瓦には大きく分けて2種類の区分がある。ひとつは建築用煉瓦であり、もう一つは耐火煉瓦である。前者は建築物や土木構造物などを構築する材料として広い範囲で用いられる。したがって、かつては建築用煉瓦が住宅・学校・工場・倉庫・橋・トンネル・水路・鉄道などに大量に使われた。しかし、これらは現在のわが国において、建物の化粧（仕上）材料・インテリア素材・歩道の舗装材料・花壇などに散見される程度である。後者の耐火煉瓦は、鉄や銅などの金属またはそれらの合金を高温で溶かすための炉を築くのに使用されている。江戸時代末には、反射炉を建設する場合に不可欠であった耐火煉瓦を製造すること自体に苦勞した。今日では大型の高炉の内貼り用ほかの用途として、定常的に耐火煉瓦が大量生産されている。

高炉とは鉄鉱石から鉄を溶かすための、現代の溶鉱炉である。往時の溶鉱炉よりも大規模で高さが高いために、単なる溶鉱炉という名称ではなく、高炉と呼ばれている。高炉の外周りは鋼鉄でつくられている。けれども溶かされて液状になった鉄が直接ふれる部分は、同じ鉄材では溶かされてしまう。そのために高炉の心臓部である溶鉱部内側は、高温に耐えることのできる耐火煉瓦を貼るのである。この事情は坩堝（るつぼ）も同じである。坩堝とは溶かされた液体状態の鉄の湯を汲み上げたり受けとったりするための、大きなバケツ状の器具である。だが高炉と同様で、やはり外側は鋼製であり、その内部には耐火煉瓦で内貼りを施している。

建築用煉瓦と耐火煉瓦を別の分け方でいえば、前者が普通煉瓦であり、後者は特殊煉瓦である。その理由は建築用煉瓦が普通の粘土と土から製造されるのに対して、耐火煉瓦は特殊な耐火土がなくては生産が不可能だからである。耐火煉瓦を焼成するためには、珪藻土（けいそうど）と呼ばれる特殊な土や、人工的なシャモットなどを入手する必要がある。珪藻土とは珪藻が堆積した、もろいけれども軽量で耐火性のある特別な土である。朝顔の形をした焔炉（こんろ）の一種である七厘・七輪（しちりん）を形づくっている土が珪藻土で、一般的には白色をしている。シャモットとは、いったん焼いた普通の煉瓦を細かく砕いた粒状の材料である。このシャモットを別の耐火土と一緒に成形し再度、焼成して高温に耐えることのできる耐火煉瓦に仕上げるのである。

さらに建築用普通煉瓦と耐火用特殊煉瓦を簡単に識別する方法がある。それは両者の煉瓦の耐火温度を測定したりするのではなく、両方の煉瓦を目で見比べれば一目瞭然である。その違いは、煉瓦の色にある。珪藻土の箇所ですぐに触れた通り、耐火煉瓦は白い色調を呈している。このため耐火煉瓦は、白煉瓦とも呼ばれる。これに対して建築用の普通煉瓦は、一般的に赤煉瓦と呼ばれる。このように建築用煉瓦と耐火煉瓦の違いは、その色によって容易に判別することができる。

しかし赤煉瓦すなわち建築用の普通煉瓦は、赤い色だけに限るわけではない。土を固めて乾燥させただけの煉瓦を、日干し煉瓦（ひぼしれんが）という。それとは別で、窯の中に入れて火で焼いた煉瓦を焼成煉瓦と呼ぶ。日干し煉瓦は土の色をしている。焼成煉瓦の中でも、火力が弱く焼きの甘い場合には、煉瓦は肌色をしている。ところが、焼成温度が摂氏 700 度から 800 度くらいになると、みかん色をし始める。850 度から 900 度程度で普通の赤色煉瓦になる。それが摂氏 1000 度～1050 度では赤紫色であったり、窯の中の位置によっては黒褐色を呈したりする。

焼成温度の差だけでなく、窯の中の酸素量の差によって、酸化焼成になる時と還元焼成になる場合があり、この違いは焼き上げられた煉瓦の色調の違いとして現れる。それ以上に煉瓦の色を直接左右する要素は、土の中に含まれている成分である。従来の日本の国産煉瓦には多くなかったが、ヨーロッパ諸国の煉瓦には黄色、緑色、青色など多彩な色調を見せる煉瓦が少なくない。煉瓦の発色に影響を及ぼす成分とは、ほとんどが砂鉄などの金属類である。普通煉瓦に用いられる土の種類が、国や土地ごとによって違うのである。

実は日本語で赤煉瓦という場合には、赤色煉瓦のみを指すのではない。日干し煉瓦も、肌色煉瓦も、みかん色も、赤色も、赤紫も、黒も、黄色も、緑色も、青も、灰色も、桃色の煉瓦も赤煉瓦である。建築や土木に使われる普通煉瓦は、すべて赤煉瓦と総称される。つまり白色をしている耐火煉瓦以外は、建築用の普通赤煉瓦なのである。

IV 舞鶴市立赤れんが博物館

その赤煉瓦を主要な展示分野として設定しているのが、舞鶴市立赤れんが博物館である。この博物館の正式な英文名称は、Maizuru World Brick Museum としている。この博物館においては、煉瓦は漢字を用いることなく“れんが”と仮名書きされている。その最大の理由は、煉瓦の煉の字が現代の日本人には必ずしも身近ではない文字であるという点にある。このように、漢字で表示しては入館者や一般の人々に理解してもらいにくいであろうと言う配慮をはたらかせている。その結果、歴史上の煉瓦製造会社など固有の名称を表示する場合を除いて、すべて赤れんが博物館においては“れんが”という平仮名による表記を用いている。

舞鶴市は京都府北部に位置する市で、日本海側の若狭湾に面した一地方都市である。府庁が置かれている京都市からは、鉄道を使っても片道1時間半から約2時間近くかかる場所である。このような地理的な条件もはたらい、現在の人口は約10万人から9万人代半ばにかけて少しずつ減少しつつある。けれども第二次世界大戦以前には、およそ20万人ほどの人口を擁していた。

そのように多くの定住人口を舞鶴市が有していた理由は、第二次世界大戦終結まで海軍鎮守府と海軍工廠が当地におかれていたためであった。現在の舞鶴市内の東側半分を占める東舞鶴

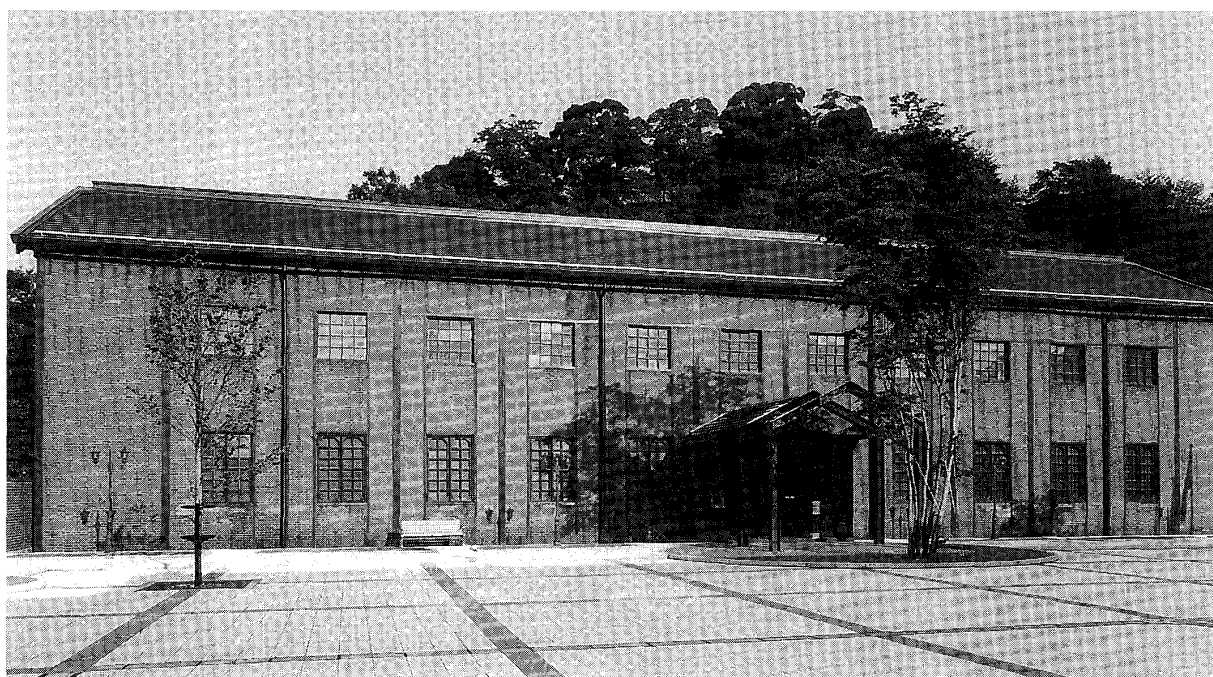


写真1 舞鶴市立赤れんが博物館正面外観

かつての新舞鶴市は、明治時代半ば以降に海軍の基地として整備され、それ以後に発展した地域である。

これに対して江戸時代以前から城下町ならびに港町としての歴史を誇ってきたのが、現舞鶴市域西側半分の西舞鶴地区である。この地域は、かつて舞鶴市という名称で別に独立した行政区を構えていた。

舞鶴に旧海軍舞鶴鎮守府が開庁したのは、明治 34 (1901) 年のことであつた。²⁾これは正しく 20 世紀元年にあたる。ところが舞鶴を軍港として整備しようとする動きは、それより相当に早い時期からあつた。明治 20 年には、すでに舞鶴を鎮守府予定地に指定している。³⁾

明治 33 年には鎮守府の上水道のための水源貯水池を完成させている。そして翌年に浄水場を整備して、給水を開始している。時は日清戦争と日露戦争と挟まれた激動の時代で、日本海側の国防・軍備を急ぐ必要のあつた時期である。

また舞鶴海軍工廠の前身である舞鶴造兵廠、造船廠が発足したのも、明治 34 年であつた。これが正式に舞鶴海軍工廠となるのは、同 36 年のことである。

以上のように舞鶴市の東地区は、明治時代以降に海軍のまちとして急激に発展してきた。軍備を進める目的から、国家の予算がこの土地に大量に投下された。その結果、現在でも最もはっきりとした形で人々が目にすることのできる資産として残されたものが、ほかならぬ赤煉瓦の建造物群なのである。官庁工事だけでなく煉瓦造による工場、倉庫、社屋、車庫、門、煙突、砲台、煉瓦焼成窯、神社の水盤舎、仏教寺院の参道、トンネル、橋梁の橋脚、貯水池、配水池などは、舞鶴市の歴史と文化を代表する遺産である。さらに他の都市には見られない景観上の貴重な資源として、舞鶴市が自慢することのできる財産でもある。これらを前面に押し出すことによって、舞鶴市民がわがまちを誇りに感じる大きな要素となり得る。

今日までに確認されている範囲内に限っても、舞鶴市内に残存する煉瓦造の遺構は、114 物件⁴⁾にも及ぶ。このように大量の煉瓦造が残されていたのである。この事実に基づけば舞鶴市の場合、市立の博物館を開設する際には、もともと“れんが”という素材に焦点を合わせることに必然性があつた点に気付く。そもそも赤れんが博物館に活用転換された建物自体が、明治 36 年に竣工した鉄骨煉瓦造の旧魚形水雷庫なのである。つまり敵の軍艦を攻撃する魚雷を格納しておくための倉庫であつた。そのように軍事的な歴史的建築を、博物館（写真 1 参照）という文化的な施設に転用したことになる。

舞鶴市立赤れんが博物館の開館年月日は、平成 5 (1993) 年 11 月 6 日であつた。この開館日にあわせて、博物館の図録である『赤れんが物語』⁵⁾という書籍を発行している。その内容は、博物館開設の経緯、この博物館として再利用された歴史的建物の紹介、世界四大文明のれんが、れんがの製造方法、れんがの窯、世界と日本の赤れんが、世界と日本のれんが建築、日本のれんが生産の歴史、れんがの刻印、舞鶴市とれんが、れんがの未来ほかである。

この博物館のメイン・テーマは勿論“れんが”である。しかし、これとは別に隠された主題もある。それらは“煉瓦と建築”ならびに“近代化と世界”である。さきに紹介した『赤れん

が物語』の内容からも窺えよう。

赤れんが博物館の開館以来の入館者数は、平成5年度は5カ月に過ぎないが23,906人、翌年の平成6年度が70,403人、同7年度78,310人、同8年度68,128人、同9年度58,989人、そして本年度は2カ月分のみ⁶⁾の集計であるが11,299人である。この総計は311,035人に昇っている。近年、来館者数の減少傾向が見られるが、それにしても年間の利用者数が住民の総数の3分の1を超える実数を数えているのは、この種の地方博物館としては成功⁷⁾と判断される。今後は日本全国そして世界各国のれんがとれんが建造物に関する情報を収集して発信するターミナルとして整備・充実されることが望まれる。そして何よりも、れんがや都市という視点を通してではあるが、舞鶴市民のまちづくりに際して心の拠り所となるよう期待している。

V 江別市セラミックアートセンター

赤煉瓦を収集・展示している2番目の博物館は、北海道江別市のセラミックアートセンターである。江別市は北海道のほぼ中央部に位置する市で、道央の中心都市である札幌市の東側に接している。石狩川と千歳川の合流地点である。2本の川（江）が分かれる（別）場所なので江別と名付けられたという。江別市の人口は現在11万人を超え、まもなく12万人に達しようとしている。札幌市に隣接しているという地理的条件の有利さもあって、人口は順調に伸びている地方都市である。

この博物館の正式な名称は、“江別市陶芸の里 セラミックアートセンター”というものである。英文名はEBETSU CERAMIC PARKと称している。この一連の文化展示施設は、北海道江別市西野幌114の5に開館した。当該敷地は江別市街地の南側であり、野幌森林公園の東端に位置している。JR函館本線の駅からは距離的に遠いものの、市内全域の中でも良好な地盤と自然に恵まれた、広さにも余裕のある敷地を有している。京都府舞鶴市の赤れんが博物館が、市役所に隣接して都心に設けられたのとは対称的である。

この施設には煉瓦の展示室だけでなく、いわゆる一般的な皿や壺や造形作品など工芸品としての陶磁器の展示室もある。例えば施設内の一角に設けられた、陶芸家の故・小森忍（こもりしのぶ）のコーナーなどは注目に値する。小森が、陶芸家としての感覚面と窯業技術者としての科学性の両面を合わせ持っていた事実を明快に表現している。

上に述べた事例でも明らかなように、当セラミックアートセンターのねらいとしては、窯業製品の内のひとつが“煉瓦”という位置付けなのである。この点は、舞鶴市立赤れんが博物館が、“れんが”“建築”“都市”“近代化”そして“世界の文化”を主要テーマに設定していたのとは大きく異なる。筆者が受けとった印象では、当施設の主題には“陶磁器”“陶芸家”“窯業”“煉瓦”そして“産業”などの“歴史”が設定されているように思われる。

またセラミックアートセンターの中には、展示室以外にも、陶磁器を制作するための工房や集会室なども設けられている。工房の内部には、作業室や窯も設備されている。それらが対象とする内容は、専門家である陶芸家のための貸し工房もあるし、親子連れなどの一般市民向け

の教室としても活用されている。やはり、まちづくり・人づくりの拠点として活用されることを目指している点では、舞鶴市立赤れんが博物館と同様である。

歴史的に由緒のある古い建物ではないが、新たに設計・新築された建築物ということもあって、施設の規模や充実の度合いという点から比較すると、江別市陶芸の里セラミックアートセンターの方が、舞鶴市立赤れんが博物館よりも進んでいると判断される。

それでは何故に煉瓦なのか。江別市も煉瓦のまちなのである。そのうえ現役の煉瓦生産地である。今も昔も煉瓦を焼いてきた。元来、北海道は近代以降の新天地である。したがって建築物は基本的に、すべて近代建築である。洋風の近代建築と煉瓦造建築の縁は、切っても切れない。結局、北海道の各都市は煉瓦のまちだと言えることになる。それでは更に別の要素を加えて、とりわけ煉瓦のまちだと主張するためには、煉瓦をつくっているまちであることが最も強い。広い北海道の中にあっても、その条件を今なお満たしているのは江別市だけである。

江別市内で一番最初に煉瓦を製造したことを文献的に確認することができるのは、明治24年12月の江別太煉化石工場の発足である。江別太（えべつぶと）とは石狩川と千歳川の合流地点よりも少し東側にあたる、石狩川左岸の地である。

市域の東側ではなく、中央部から札幌寄りの場所である野幌地区は煉瓦生産の中心的地帯であった。現在でも煉瓦の専門工場が数社稼働している。自社の製品に煉瓦も含めているという企業を加えれば、その数は更に増える。北海道庁旧庁舎に使われた煉瓦を明治20年代に焼いた場所は、現在の札幌市白石区である。札幌の中心街からは江別市野幌側に近い場所である。

江別市内には歴史的な煉瓦の建造物も残されている。市内現存最古の煉瓦造遺構は、江別市萩ヶ岡19に建つ旧火薬庫⁹⁾で、明治19年の竣工である。明治大正期の煉瓦建築物だけでなく市内には昭和後期や平成期になってから新築された煉瓦造の建物も60棟以上現存している。

このように北海道江別市は煉瓦のまちである。かつて京都府の舞鶴市は煉瓦の製造を続けていたまちである。しかも煉瓦の消費地でもあり、歴史的な煉瓦の建物や土木構築物が数多く残されている。これに対して北海道江別市は現業の煉瓦のまちなのである。煉瓦のみに限らず窯業という産業が今なお存続している都市である。その意味では江別市内には、未来にむかって窯業面の技術的な改良・研究を進める公的機関が必要であった。江別が煉瓦の博物館を内包するセラミックの研究機関を新設したのは、当然の必要性が存在したわけである。

セラミックアートセンターが開館したのは平成6年11月19日のことであった。早くも満4年を迎えようとしている。今後は陶芸家を育てる学窓として、窯業関係の先端技術を開発する研究所として、まちづくりの中心機関として、そのうえに博物館本来の機能である展示公開施設として広く利用されることが望まれる。

VI イギリスの煉瓦博物館

世界の煉瓦博物館、第3番目の事例として報告するのは、イギリスの煉瓦博物館である。この博物館の正式な名称は、The Museum of Brick である。この博物館は、以前に煉瓦会社と

して稼動していた工場の跡地と設備をほぼそのまま活かして展示施設に転用しつつある。

かつての煉瓦会社の名称は、バーズルドン・ブリック・カンパニーであった。過去においては、ロンドン市内へも煉瓦造建築物建設用の資材として生産・供給された。会社のイニシャルである B. B. C. という刻印を、煉瓦の平（ひら）に陰刻したプレス成形の凹（くぼみ）煉瓦を大量に製造していた。煉瓦の平とは、煉瓦6面の内、最も広い2面である。B. B. C. 煉瓦の場合には、煉瓦の平1面に刻印を押印している。凹煉瓦とはヨーロッパの煉瓦に見られる、平に大きな凹のある煉瓦で、煉瓦を積む際この凹に接着剤であるセメント・モルタルを載せながら積み上げていく。類似の刻印入り凹煉瓦がロンドン・ブリック・カンパニーでも製造され、それには L. B. C. の文字が同じように見られる。この煉瓦も、煉瓦の平1面にだけ刻印を押していた。

当該煉瓦博物館があるのはイングランドの南海岸サウサンプトン Southampton の市域内にあるバーズルドンである。サウサンプトンという海洋都市は、かつては軍港として栄えた。現在では商業港として性格を変えながら発展している。サウサンプトンという名称から連想されるのは、オックスフォード Oxford の北側にあるノーサンプトン Northampton という名の都市である。おそらく北と南で対をなしているのではなかろうか。どちらも首都ロンドンを中心にして、ロンドンを取り巻くようにする同心円状に乗る距離に位置しているからである。

またサウサンプトンは、同じくイングランド南海岸線の都市ポーツマス Portsmouth の西側にあたる。ポーツマスは過去においてのみならず、現在でもイギリス海軍の主要な軍港として整備されている。ポーツマスは前述した京都府舞鶴市と姉妹都市の関係にある。

バーズルドンは港町サウサンプトン市の中でも海岸部ではなく、少し内陸に位置している。けれども歴史的な煉瓦工場が備えている水運上の条件はきちんと満たしており、川ぞいに立地していた。古い時代の煉瓦工場は材料や燃料の供給と、製品搬出のための運送経路として船の便が不可欠であった。当煉瓦博物館の元となっている旧煉瓦会社も例外ではない。

サウサンプトン駅を降り立ち、自動車で10分ほど海岸ぞいに東側へ走る。やがて川に沿って少し北方向の陸側に入った所が当博物館の所在地である。途中で幾つかの橋を渡る。川と道路が交差しているためである。

写真2の外観写真に見られる通り、工場跡の敷地は広い。周囲に自然も残されている。また工場や設備などの建物は、ほぼ1カ所に集まっている。博物館として再生するには好都合な点もあるように見受けられた。

写真3は旧バーズルドン煉瓦会社の中央部である。向かって右側にあるのが、ヨークシャー・タイプの煉瓦窯、ヨークシャー・キルン Yorkshire Kiln で写真中央が窯の煙突である。おそらくイギリスのイングランド中北部に位置するヨークシャー地方で発達した煉瓦焼成窯であろう。この地方には、内陸の都市としてヨーク York がある。観察した限りでは、ヨークシャー・キルンは数多くの焼成室を備えた多房（多室）型の煉瓦窯であった。その点、長いトンネル状の焼成室が一室あるだけのホフマン窯とは、全くタイプが違っていた。

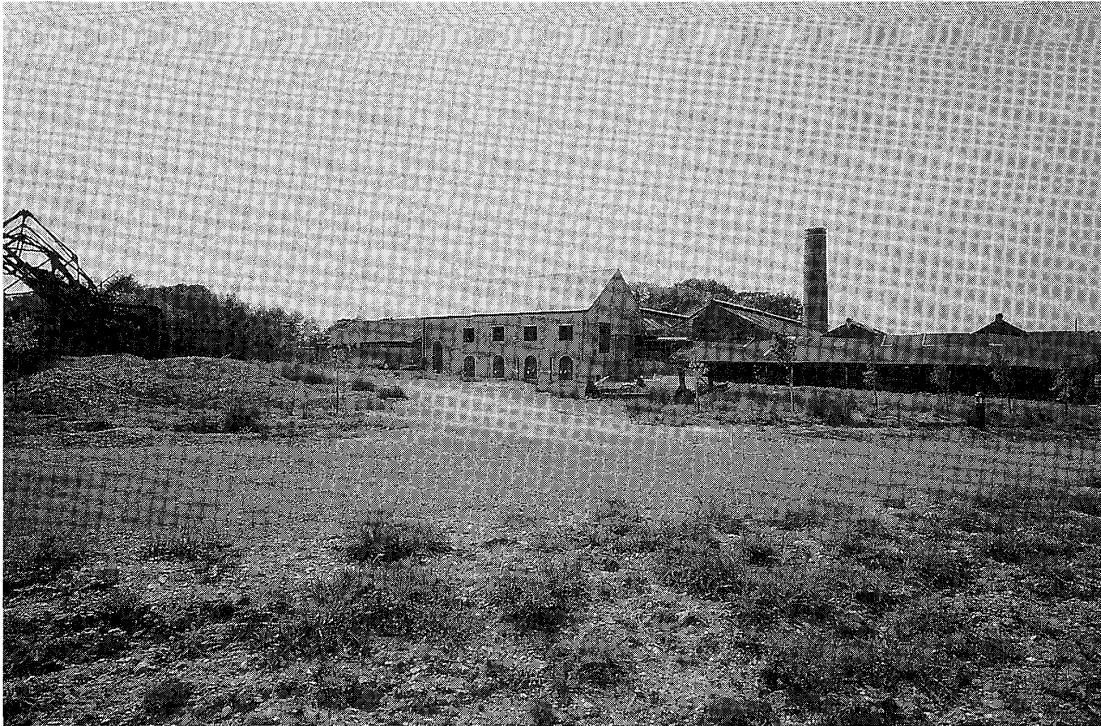


写真2 イギリスの煉瓦博物館全景

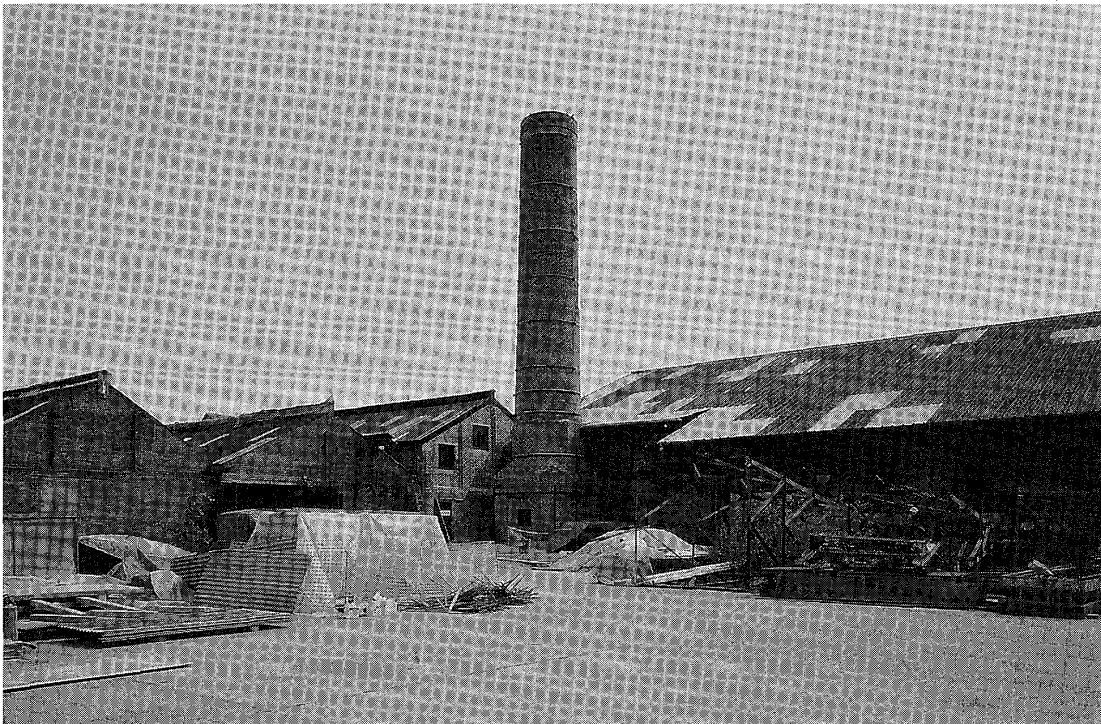


写真3 イギリスの煉瓦博物館にあるヨークシャー煉瓦窯

この施設を訪問したことは前後2度ある。第1回は平成5年5月で、2回目は平成8年の同じく5月であった。第1回目に訪ねた時は、まだ全くの準備段階であった。当時の担当者はダイアナ女史であったが、2度目には担当者が変わっていた。それは2回目の訪問時には、部分

的ではあるが既に博物館としての展示機能をスタートさせていたため、組織的にも変更があったものと推察される。

この煉瓦博物館の開館準備と開館後の運営などは、基本的にボランティアの力によっているという。イギリスのシビック・トラストが大きな組織として存在するが、当博物館は国立でも公立でもない。現在では動態保存されていることの極めて珍しい、蒸気機関などを復原操業させるためにボランティア活動としての修理作業に従事している青年などが当地にいた。この博物館は、この場所にあった煉瓦工場の建物と窯を中心的な展示物としてはいるけれども、原動機やその他の機械などは、よその工場で廃棄されたりしたものの中で歴史的に貴重で修理可能なものを運び込んでいる。したがって単に収蔵品を展示するだけでなく、過去の技術そのものを保存する博物館にもなっている。

VII 中国の煉瓦博物館

次に報告する中華人民共和国の煉瓦博物館の場合には、正確にはまだ博物館として公開されてはいない。その場所は中国の上海市の郊外、昆山市である。この一帯は平坦な土地が続き、緩やかな川の流れがあり、幾つかの煉瓦工場が点在している。その内の1カ所に、3室を煉瓦の収蔵・展示室にあてている煉瓦工場がある。工場名は国营大東磚瓦廠で、その施設の名称は磚瓦（ツァン・ワー）陳列館である。磚とは現代の中国語で煉瓦を意味する。発音は普通ツェンであるが、日本では古くから“せん”と読むのが一般的である。

ここが煉瓦に関心を示して、収集し、公開はしていないもののガラスのショー・ケースに納

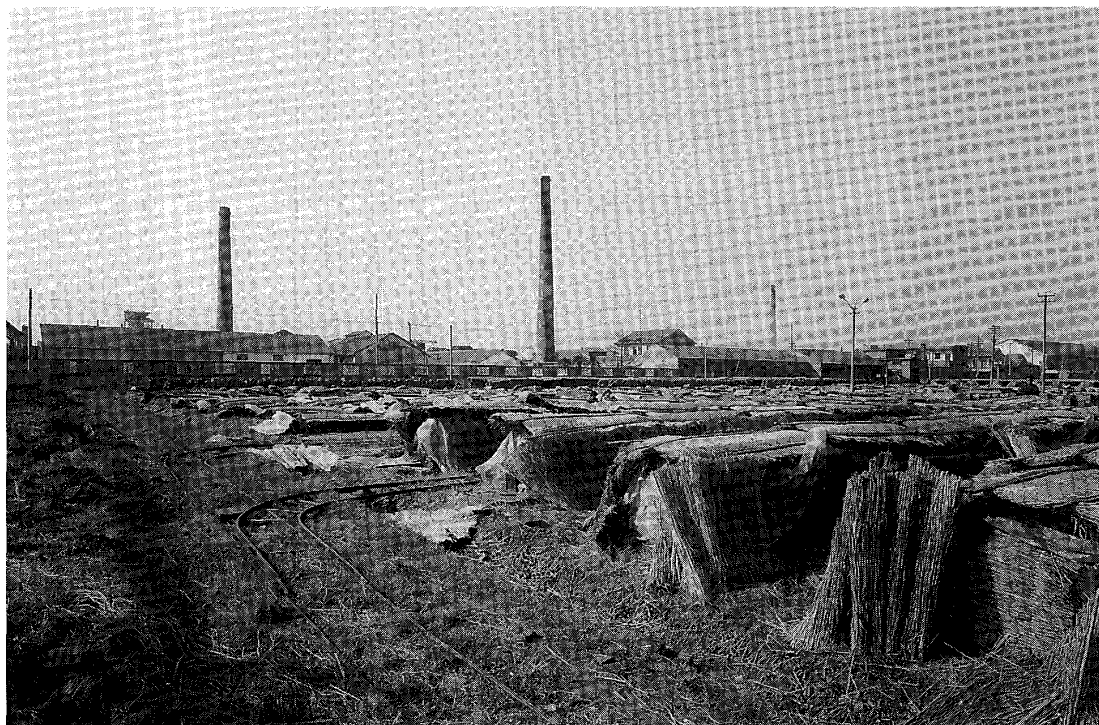


写真4 磚瓦陳列館をもつ中国の煉瓦工場、大東磚瓦廠

めて保存している最大の理由は、現業の煉瓦工場だからである。ただし積極的に歴史的な煉瓦を世界的な規模で収集したわけではない。煉瓦会社という関係から偶然に託されたり、集まってきた品をストックしてきたというのが正直なようである。1970年から整備し、専門家向けに公開しているが、基本的には宣伝をしていないという。

この展示室を訪問したのは平成6年12月22日であった。その時に、今後の予定あるいは希望に近い発言を聞くことができた。可能な限り完全な姿の博物館に近づけて、一般公開をしたいとのことであった。そのためには現状のスペースでは、あまりにも手狭である。できることならば独立した博物館専用の建築物を与えられることが望ましい。

また煉瓦製造の技術者だけではなく、歴史学や博物館学の専門家が採用される必要がある。現在は上海同済大学の陳先生が顧問をしておられる。今の状態は工場の責任者が、見学希望者に限って案内をしているのである。展示や研究が充実した際には、万里長城の煉瓦など中国煉瓦の重要なターミナルになるものと思われる。

VIII その他の事例

以上述べてきた煉瓦の博物館や展示館の他にも、類似の施設を開設したいとする動きはあるようだ。イギリスの煉瓦博物館を2度目に訪問した折、今後カナダにおいても煉瓦の博物館を開くための準備を進めていると耳にした。日本人の感覚から言えば、カナダは木の国という印象が強い。そのカナダにおける煉瓦博物館設置の計画である。新しい傾向といえよう。

このほか博物館と呼べるほどの規模ではないけれども、埼玉県深谷市上敷面（じょうしきめん）に煉瓦の展示室が設けられた。ここにある日本煉瓦製造株式会社のチーゼの館には、自社の煉瓦と共に日本の煉瓦の歩みが展示されている。

また煉瓦ではなく建築用タイルの博物館も、わが国に設置されている。愛知県常滑市にある株式会社 INAX の“タイル博物館”や“窯のある広場”そして三重県の同社“上野緑工場”の展示コーナーなどである。

そのほか必ずしも具体化している事例だけではないが、日本の各地で赤煉瓦建築による地域おこしや、タイルをテーマにした博物館でまちおこしをしようとしている都市がある。煉瓦は広島県の一都市で、タイルは岐阜県内での計画である。今後も注意深く各地・各国の動きを見守っていく必要がある。

IX む す び

以上、わが国とイギリスそして中華人民共和国に開設されている煉瓦博物館や煉瓦展示収蔵施設を報告してきた。その視点は、各国・各地が何ゆえに煉瓦に着目して博物館などを設置することになったのかと言う経緯を確認することと当該施設設置のねらいを明らかにすることにあつた。上記3国以外のカナダの事情はよくわからないが、いずれにしても何らかの必然的な理由があつたものと推察される。

それぞれの土地が煉瓦博物館を新たに設けるまでに至った理由のうち最大のものは、その土地にとって煉瓦という建築材料が極めて重要な存在であったという点である。この事実こそが、各地が固有する歴史や文化を積極的に評価しようとする動きに呼応する。そして博物館建設を引き金にして、個性的なまちづくりを始めようとする人々の試みそのもののエネルギーの源になり得る。

また各煉瓦博物館が抱える条件や問題点は、さまざまであった。同様に、それぞれの博物館が目標として掲げるねらいも微妙に違っている。それらの相違点も、各地の博物館を取り巻く歴史や産業などの社会的条件によって左右される。そのような条件の差を比較することを試みてみた。

最近のまちづくりにおける新しい動きは、制度面を改める点のみに終始してはいない。むしろ最終的には、そこに住む人々自身が自分の土地の良さに気付き、自分たちの町を自慢することができるようになるまでの意識改革を目指している。その目標を達成するための一つの手法として、個性的な博物館の建設が考えられるのである。

ソフトな面を多分に含む概念である“まちづくり”は、今後の日本において大きな課題となる生涯学習の大きな研究分野である。“まちづくり”と“ひとづくり”と“博物館構想”この3点は、近い将来わが国の成熟社会において重要な課題になるものと考えられる。

X 参 考 文 献

- 1) 「世界の煉瓦博物館」水野信太郎、『輪環 第28号』立花恒平、赤煉瓦ネットワーク、1998年7月22日、p.3
- 2) 『舞鶴赤煉瓦浪漫』まいづる建築探偵団、舞鶴まちづくり推進調査研究会、平成2年11月25日
- 3) 『舞鶴の赤煉瓦 1889 ▶ 1991』まいづる建築探偵団、まいづる建築探偵団、1991年8月3日、p.62掲載の「年表」より
- 4) 『舞鶴赤煉瓦建造物群調査』日本ナショナルトラスト、日本ナショナルトラスト、平成9年3月15日
- 5) 『赤れんが物語』水野信太郎、舞鶴市立赤れんが博物館、1993年11月6日
- 6) 「舞鶴市における煉瓦造建造物の活用の現状について」黒田悠三、『近代の遺産保存研究会～煉瓦の保存について～資料集』東京国立文化財研究所、東京国立文化財研究所、平成10年6月29日、p.9より。なお黒田悠三氏は舞鶴市立赤れんが博物館館長
- 7) 「舞鶴市立“赤れんが博物館”の今日」水野信太郎・野口英一郎、『産業遺産研究 第3号』産業遺産研究編集委員会、中部産業遺産研究会、1996年6月2日、p.77
- 8) 『野幌窯業史』松下亘、野幌窯業振興協会、昭和55年7月25日、p.195
- 9) 『江別れんがアラカルト れんがの建物・道・公園』石垣秀人、江別まちづくりフォーラム、1992（平成4）年3月、p.84